

班女

世阿弥作

| | | | | | |
|----|------|------|------|---|-------|
| 季は | 地は | シテ | ワキ | 後 | 前 |
| 秋 | 前は美濃 | トモ | 吉田少将 | | 狂言宿の長 |
| | 後は京都 | 従者 | | | 花子 |
| | | 前に同じ | | | |

「かやうに候ふ者は。美濃の国野上の宿の長にて候。

さても我花子と申す上脇を持ち参らせて候ふが。

過ぎにし春の頃都より。吉田の少将とやらん申す

人の。東へ御下り候ふが。此宿に御とまり候ひて。

かの花子と深き御契の候ひけるが。扇をとりかへ

て御下り候ひしより。花子扇に詠め入り。闇より

外にいづる事なく候ふほどに。かの人を呼びいだ

し追ひいださばやと思ひ候。いかに花子。今日よ

りしてこれには叶ひ候ふまじ。とくく何方へも
御いで候へ。

「げにやもとよりも定めなき世といひながら。うき
ふしげき河竹の。流れの身こそ悲しけれ。

「わけ迷ふ。ゆくへも知らでぬれ衣。

「野上の里を立ちいでゝ。く。近江路なれど憂き
人に。別れしよりの袖の露。そのまゝ消えぬ身ぞ
つらき。く。 (中入)

「帰るぞ名残富士の嶺の。く。ゆきて都にかたらん。

詞
「是は吉田の少将とはわが事なり。さてもわれ過ぎにし春の頃東に下り。はや秋にもなり候へば。只今都に上り候。

道行

「都をば。霞と共に立ちいでゝ。く。しばし程ふる秋風の。おと白河の関路より。また立ち帰る旅衣。浦山すぎて美野の国。野上の里に着きにけり。

く。

詞

「いかに誰かある。いそぐ間これはゝや美濃の国野上の宿にて候。此所に花子といひし女に契りし事あり。いまだ此ところにあるか尋ねて來り候へ。

トモ詞

「畏つて候。花子の事を尋ね申して候へば。長と不和なる事の候ひて。今は此ところには御入りなきよし申し候。

ワキ詞

「さては定めなき事ながら。もし其花子帰りきたる

事あらば。都へついでの時は申し上せ候へとかたく
申しつけ候へ。急ぐ間ほどなく都に着きて候。わ
れ宿願の子細あれば。是より直に糺へ参らうずる
にて候。皆々参り候へ。

後ジテ一声
「春日野の雪間をわけて生ひいでくる。草のはつか
に見えし君かも。

詞
「よしなき人に馴衣の。日を重ね月はゆけども。世
を秋風のたよりならでは。ゆかりを知らする人も
なし。夕暮の雲の旗手に物を思ひ。うはの空にあ
くがれいでゝ。身を徒になす事を。神や仏も憐み
て。

カール
「思ふことをかなへ給へ。それ足柄箱根玉津島。貴
船や三輪の明神は。夫婦男女のかたらひを。まも
らんと誓ひおはします。此神々に祈誓せば。など
か験のなかるべき。謹上再拝。恋ひすてふ。我名
はまだき立ちにけり。

地「人しれずこそ思ひそめしが。

シテ「あら恨めしの人心や。

サシ「げにや祈りつゝ。御手洗川に恋せじと。誰かいひ
けん空言や。されば人心。まことすくなき濁江の。
澄まで頼まば神とても。受け給はぬはことわりや。
とにもかくにも人しれぬ。思ひの露の。

下歌地「置きどころ。いづくならまし身の行方。

上歌「心だに。誠の道にかなひなば。く。いのらずと

ても。神や守らんわれらまで。真如の月はくもら
じを。知らでほどへし人心。衣の玉はりながら。
恨みありやともすれば。猶おなじ世と祈るなり。
く。

トモ詞「いかに狂女。なにとて今日は狂はぬぞ面白うくる
ひ候へ。

シテ「うたてやなあれ御覧ぜよ今まで。ゆるがぬ梢と
見えつれども。風のさそへば一葉もちるなり。た

まく心すぐなるを。狂へと仰せある人々こそ。

風狂じたる秋の葉の。心もともに乱恋の。あら悲しや狂へとな仰せありさむらひそよ。

トモ
「さて例の班女の扇は候。

シテ
「うつゝなや我名を班女と呼び給ふぞや。よしく
それも憂き人の。形見の扇手にふれて。うちおき
がたき袖の露。古事までも思ひぞいづる。

カル
「班女が閨の内には秋の扇の色。楚王の台の上には

夜の琴の声。

地
「夏はつる。扇と秋の白露と。いづれか先に起臥の。

クリ
「床冷しや一人寝の。さびしき枕して。閨の月をな
がめん。

シテ
「月重山にかくれぬれば。扇をあげてこれをたとへ。
「花琴上に散りぬれば。

地
「雪をあつめて春を惜しむ。

シテサシ
「夕べの嵐あしたの雲。いづれか思ひの妻ならぬ。

地「さびしき夜半の鐘の音。鶏籠の山に響きつゝ。明

けなんとして別れを催し。

シテ「せめて闇もる月だにも。

地「しばし枕に残らずして。又ひとりねに為りぬるぞ
や。

クセ「翠帳紅闌に。枕ならぶる床の上。なれし衾の夜す
がらも。同穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の。
命のみをさりともと。いつまで草の露のまも。比

翼連理のかたらひ。其驪山宮のさゝめごとも。誰
か聞きつたへて。今の世まで漏らすらん。さるに
ても我夫の。秋より先に必と。夕べの数は重なれ
ど。あだし言葉の人心。頼めてこぬ夜は積れども。
欄干に立ちつくして。そなたの空よとながむれば。
夕暮の秋風。嵐山おろし野分も。あの松をこそは
音づるれ。我待つ人よりの。音づれをいつ聞かま
し。

シテ
「せめてもの。形見の扇手にふれて。

地
「風の便と思へども。夏もはや杉の窓の。秋風冷か
に吹き落ちて。団雪の扇も雪なれば。名を聞くも
すさましくて。秋風恨みあり。よしや思へば是も
げに。あふは別れなるべし。其むくいなれば今さ
ら。世をも人をも恨むまじ。只おもはれぬ身のほ
どを。思ひつゞけて独居の。班女が閨ぞさびしき。
地
「絵にかける。 (舞)

シテワカ
「月をかくして懷に。もちたる扇。

地
「とる袖も三重がさね。

シテ
「其色衣の。

地
「夫のかねこと。

シテ
「かならずと夕暮の。月日もかさなり。

地
「秋風は吹けども荻の葉の。

シテ
「そよとの便も聞かで。

地
「鹿の音虫の音も。かれぐの契。あらよしなや。

シテ 「かたみの扇より。

地 「かたみの扇より。猶裏表あるものは。人心なりけるぞや。扇とはそらごとや。逢はでぞ恋は添ふ物を。く。

ワキ詞 「いかに誰かある。あの狂女が持ちたる扇見たきよし申し候へ。

トモ 「いかに狂女。あの御輿の内より。狂女のもちたる扇御覧じたきとの御事にて候。まるらせられ候へ。

シテ 「是は人のかたみなれば。身を離さでもちたる扇なれども。形身こそ今はあだなれ是なくは。忘るゝひまもあらまし物をと。思へどもさすがまた。そふ心地するをりくは。扇とる間も惜しきものを。人に見する事あらじ。

ロンギ地 「こなたにも。忘れがたみの言の葉を。磐手の杜の下躊躇。色に出でずはそれぞとも。見てこそ知らぬこの扇。

シテ
「見てはさて。何の為めぞと夕暮の。月をいだせる
扇の絵の。斯くばかり問ひ給ふは。なにの御為な
るらん。

地
「何ともよしや白露の。草の野上の旅寐せし。契の
秋は如何ならん。

シテ
「野上とは。野上とは東路の。末の松山波こえて。
帰らざりし人やらん。

地
「末の松山たつ波の。何か恨みん契りおく。

シテ
「形身の扇そなたにも。
地
「身にそへ持ちしこの扇。

シテ
「輿のうちより。

地
「とりいだせば。をりふし黄暮に。ほのぐ見れば
夕顔の。花をかきたる扇なり。此上は惟光に。
脂燭めして。ありつる扇。御覽ぜよたがひに。そ
れぞと知られ白雪の。扇のつまのかたみこそ。妹
背の中の情なれ。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第一輯』 大和田建樹著